

中動態と責任論

國分功一郎

(哲学者)

40万部突破のベストセラー『暇と退屈の倫理学』、
3月に文庫化された『中動態の世界 意志と責任の考古学』は
発売即重版が決まるなど、いま最も注目を集める哲学者に、
能動と受動の区別に対する違和感から見えてくる「中動態」と、
そこから考える社会のあり方、次作の構想まで聞いた。

人々の自由のために哲学している

——『暇と退屈の倫理学』に続き、『中動態の世界』
がこの春に文庫化されました。これで國分先生
の二冊の主著がいつそう手にとりやすくなった
と思いますが、反響はいかがですか。
國分 文庫にするとまったく違う読者層に届く
ので、本当によかったなと思っています。

『暇と退屈の倫理学』は、哲学の知識がまった
くなくてもすらすら読めるよう書いたもので、そ
の甲斐もあってか驚くほど多くの人に届いてい
るようです。『中動態の世界』は、わかりやすい
ものを求められすぎていることへの反発もあつ
て、わりと自分の好きなように書いたのですが、
難解な内容にもかかわらずたくさん手にとって
いただいて、非常に感謝しています。

おそらく、『中動態の世界』を見てくださって
「私とも関係がありそうだな」みたいな感覚が
あるんじゃないでしょうか。人間には勘という
ものがあるので、タイトルを見て、「いまの嫌な
社会を考えるきっかけになるかもしれない」く
らいのことは感じ取っているんだと思います。
—— いずれのご著書でも、人間の自由が大事な
テーマとなっていますね。

國分 僕自身は、人々の自由のために哲学して
いる、と言うとちょっとカッコつけすぎですが、
そういう気持ちはあります。ひと口に自由と
言っても、世の中にはすでにおびただしい紋切
り型の言葉がありますよね。例えば「社会や国
家のために個人の自由は抑制すべきだ」という
紋切り型がある。保守主義と言ってもいいで
しょう。僕はそういう考えが嫌で、自由という
ものは大切で、人々が手にすべきだという思い

が最初にありました。

それ自体が紋切り型の一つじゃないかと言わ
れるかもしれませんが。しかし哲学はそこから
「じゃあ自由とはなんなのか」を考えるもので
す。その結果の二通りの成果が、この二冊の本
になったといえるでしょう。

哲学をやる効能の一つが、世間にあふれる紋
切り型と距離を置くようになることだと思う
んですね。大学の講義でも、できるだけそれが
伝わるように努力していますし、本を書くとき
も、結論だけではなく考察の過程を一緒に楽し
んでもらえるように心がけています。

退屈とどう向き合うか

—— 新たな読者に向けて、『暇と退屈の倫理学』
について、簡単に解説をお願いします。

國分 二〇世紀の大哲学者ハイデガーは『形而
上学の根本諸概念』という本の中で、退屈とい
うものを徹底的に分析しました。そこでは退屈
の三つの形式を論じています。

第一形式は、非常に単純で、退屈させるもの
がはっきりとしていて、それによって退屈させ
られている状態です。田舎町の駅で電車がなか
なか来なくてイライラしたり、その退屈に対抗

するために地面に絵を描いて気晴らしをしよう
とする。そういう例を挙げています。これは誰
もが思いつくような退屈ですね。

不思議なのは第二形式です。ハイデガーは自
身が経験した、とあるホームパーティーを例に
挙げています。

パーティーに招待され、そこに出かけていく
と感じのいい人たちが集まっていて、美味しい
食事が出てきて、いい音楽が流れていて、葉巻
をくゆらせ、会話をして過ごします。やがて、
お開きになって帰宅して、明日の授業の準備で
もしようかな、と机に向かった瞬間に、ふと
「ああ、今晚私は退屈していたのだ」と気づく。
そういう例です。

この形式の退屈に関するハイデガーの分析は
非常に面白いのですが、結論だけ言うと、退屈
させるものはないんですよ。パーティー
なんだから、楽しませるようになってきているわけ
ですね。最初からすべて気晴らしだったのだ、
とハイデガーは指摘しています。われわれは日
常的に気晴らしを続けている。その中でポツポ
ツと、この第二形式の退屈が現れることがある、
と彼は考えます。

普通、退屈があるから気晴らしをしようと考
えますが、逆なんです。気晴らしがあつて退屈が

この続きは本誌でござー！